

特集

医師人生の岐路と選択 48

トレンドビュー

DPP4 阻害薬で脱インスリン 28

「新型うつ」はうつ病か 30

腸閉塞はステントで解消 32

ヒーローの肖像

馬原文彦氏 診療の第一線で日本紅斑熱を発見 157

Nikkei Medical

Nikkei
日経メディカル

<http://medical.nikkeibp.co.jp>

10

October 2012

2012年10月10日発行
(毎月1回10日発行) 第539号



Part1 医師6人の転機と決断



「10年後も今のカテーテル治療の技術を維持できているだろうか」——。島田栄治氏が将来への不安を抱いたのは、30歳代の半ば。国立病院東京災害医療センター(現・国立病院機構災害医療センター)放射線科に勤務し、救急患者の治療に日々忙殺されていた時だった。

島田氏は1994年の大学卒業後、画像診断のほか肝臓癌や内臓出血などへのカテーテル治療を学び、救急の最前線で腕を振るっていた。「『どんな患者でも来い!』と張りきり、充実していた」と当時を振り返る。

ただ一方で、40歳代後半になれば視力や判断力の衰えは避けられず、同じようにカテーテル治療をできるのか漠然とした不安があったという。放射線科の先輩医師を見ても、ある程度の年齢になると検査センターの所長などに就き第一線から離れていたほか、開業するにしても放射線科の標榜では難しいと感じていた。

その閉塞感を打ち破ったのが、2005年に遠隔画像診断会社を設立したことだった。きっかけは、ある地方病院の医師から、読影医の不足で迅速な画像診断ができない悩みを相談されたこと。島田氏は解決策として、画像データを送ってもらい自身が読影する方法を思い付いた。その後、他地域の病院でもこうした需要があることが分かり、「SEM medical solution」を立ち上げたのだ。



南星会湘南なぎさ診療所
(神奈川県藤沢市) 理事長

島田 栄治氏 (43歳)

1969年東京都生まれ。94年東邦大卒、同大放射線医学第二講座入局。東京女子医大脳神経センター、国立病院東京災害医療センター(現・国立病院機構災害医療センター)などを経て、2007年に湘南なぎさ診療所を開業。

需要読み”主戦場”を救急から在宅へ

ただ、当時の同氏にとって会社経営は未知の世界。経営スキルを必死に勉強したという。その過程で学んだのが、業界の成長・衰退分野を見極めて事業の方向を探ることだった。

これを参考に同氏は10~15年後の医療界を見据え、自身が医師としてどう歩むべきかを模索。そして出した答えが、高齢化で需要が高まっていた在宅医療に携わることだった。カテーテル治療や画像診断で培った技術が、在宅患者の全身管理、腹水の除去、中心静脈栄養などに生かせると感じた。07年には、勤務先の病院を退職して在宅医療専門の湘南なぎさ診療所を開業。神奈川県藤沢市を中心に診療を始めた。

会社経営の経験は、診療所の運営にも役立ったという。その一つが患者の確保方法。同診療所の営業先は、ケアマネジャーや訪問看護ステーション、高齢者住宅などに絞っている。在宅医療が必要な要介護認定者を多く抱えているため、効率的に患者を確保できるからだ。さらに、患者の満足度を上げる工夫も凝らす。一般内科だけでなく皮膚科や精神科、外科などを専門とする医師も雇い、患者のニーズに応じて専門的な診療を実施できるようにした。

こうした取り組みが奏功し、現在の患者数は、藤沢市の要介護認定者数(約1万2000人)の10%強に相当する約1800人に達する。開業当初は3人だった医師も、今では非常勤を合わせて30人以上になった。

島田氏は「今、在宅患者とのコミュニケーションが楽しくて仕方ない」と言う。そして、ある在宅患者の例を教えてくれた。糖尿病に高血圧を合併した、酒好きで薬をなかなか飲んでくれない80歳の男性。どうしたら酒量を減らしつつ、薬を飲んでもらえるか。同氏は熟考した結果、ゼロカロリービールでの服薬をお願いした。すると、見事に成功したという。

「『酒を飲むな、薬を飲め』では言うことを聞いてくれない。在宅患者は手強い」。そう話す島田氏の様子は、以前の専門のカテーテル治療を語るとき以上に充実感にあふれていた。